

各施設まつり情報

文学館まつり

- ◆日時 10月27日(日) 10:00~16:00
- ◆場所 町田市民文学館ことばらんど(原町田4-16-17)
- ◆問い合わせ 739-3420

誰でも気軽に参加できるイベント盛りだくさん!文学館で秋の一日をお楽しみ下さい。

[共催] 町田市民文学館・文学館通り商店会・原町田四丁目第二町会・原町田四丁目第二地区街づくりの会

生涯学習センターまつり ~来て見て楽しんで~

- ◆日時 10月25日(金)・26日(土)・27日(日) 10:00~17:00
- ◆場所 生涯学習センター(原町田6-8-1・町田センタービル6・7階)
- ◆問い合わせ 728-0071

生涯学習センターを利用している市民のサークル・団体が中心となって行います。今年も、発表の部、展示の部、模擬店あわせて56団体が参加します。舞台ではダンス、和太鼓、ウクレレ、合唱、演劇等。ギャラリー等では俳句、絵画、生け花、パソコン、書道等、様々な分野の団体が日頃の成果を発表します。

来場者も一緒に参加・体験できるプログラムもありますので、是非お越し下さい。ご来場お待ちしております。



▲昨年の生涯学習センターまつりの様子(フィナーレの阿波踊り)

自由民権資料館まつり

- ◆日時 11月3日(祝・日) 10:00~16:00
- ◆場所 自由民権資料館(野津田町897)
- ◆問い合わせ 734-4508

今年も資料館や町田の歴史について少しでも知っていただければと「資料館まつり」を開催します。

当日はたくさんのイベントを企画中です。是非、資料館に足をお運び下さい。詳細は広報まちだ等でお知らせします。

展覧会情報

「赤川 次郎展 三毛猫ホームズから 愛をこめて」



10月19日(土)~12月23日(月・祝)
10:00~17:00(毎週金曜日は20:00まで開館)
休館日:毎週月曜日(11月4日は開館)、第2木曜日
場所:町田市民文学館 展示室

【観覧料】一般400円、大学生・65歳以上200円、高校生以下 無料
※ただし10月19日、10月27日、11月3日、12月23日は無料

本展は、玉川学園に在住した町田ゆかりの作家である赤川次郎氏の初の本格的な展覧会です。軽妙なユーモア・ミステリーにより10代の若い世代を中心に長く読み継がれ、人気を博している赤川氏の作家活動の軌跡を、膨大な執筆作品によって振り返ります。人間への信頼と愛情に溢れ、時間を経ても古びない作品の魅力と、そこに込められたメッセージを読み解き、人気の秘密に迫ります。会期中は、赤川氏の講演会をはじめ、様々なイベントを予定していますので、お楽しみに!

市民協働企画展

「市民の歴史研究事始め -自由民権カレッジ一期生の成果-」

入館無料

10月26日(土)~11月24日(日)
9:00~16:30

休館日:月曜日(月曜日が祝日・休日の場合は翌日)
場所:自由民権資料館 企画展示室

当館主催の歴史講座「自由民権カレッジ」第一期生の研究成果および関連史料を展示します。

連載

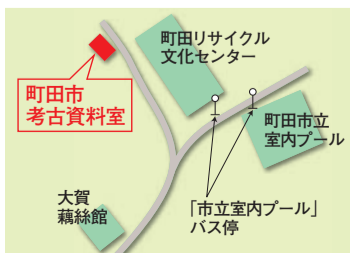
町田市の文化財をご存知ですか

第12回 浄瓶(灰釉陶器)

浄瓶は、仏前に浄水を供えるための仏具で、僧侶の出用品とも言われています。この浄瓶は、1995年に忠生遺跡の平安時代集落跡から出土しました。注ぎ口の部分は欠損していましたが、肩の盤口(水を入れる口)の造作から全体が復元できました。愛知県の猿投窯で焼かれたものと思われ、古代の国分寺跡や国府遺跡などから出土するような高級品です。忠生遺跡(木曾西二丁目付近)一帯は「こうしょう寺」の言い伝えがあり、これと関連した仏具の可能性もあります。この寺は村落内の私寺と思われるものですが、仏教が町田の古代にも浸透していたことを示す貴重な発見となりました。この浄瓶は、町田市考古資料室でご覧いただけます。



浄瓶(灰釉陶器)
復元高約28cm、忠生遺跡(木曾西二丁目)、平安時代(9世紀頃)



町田市考古資料室

住所:下小山田町4016
開室日:第2・第4土・日曜・祝日
10:00~16:00
案内:町田バスセンターからバスで市立室内プール下車、徒歩10分
電話:797-9661 ※駐車場あり

町田市の歴史の一角 近藤勇を悼む大沼枕山の詩

臣爲其主義分明 堪嗟季布
尚惜生 酬知豈暇論順逆
新選組中第一名 嗚呼東
台東奥憤戦士 駢死無聞徒
爲耳 輪君授首板橋驛 奇
聲一日馳千里

1891(明治4年)が、慶応4年(1868)4月に、新政府軍に捕らわれ、板橋で処刑された新選組の近藤勇を悼んで詠んだ詩で、『沈山先生遺稿』(明治26年に収められています)。

沈山は、小野路村の名主をつとめた、弟子の小島鹿之助(1830~1900)の懇請により、この詩を作りました。鹿之助は天然理心流の近藤周助の下で剣術を学び、周助の跡を継いだ勇とも親しい間柄だったのです。

る。知友に報いようとするの
にどうして正しいか誤ってい
るかを論じている暇などある
うか。近藤氏は新選組で一番
名が挙がる人である。ああ、
上野や奥羽で奮戦した士たち
よ。彼らは多く命を落とすた
が、それが無駄死ばかりだっ
たと言っていることをはな
い。近藤氏は主君のために尽
くし板橋の驛で敵に首を授け
た。そして、その名は一日に
して千里を馳せたのである。「
勇の死は、鹿之助にとって痛
恨事だったのでしょうか。以後、
彼は勇の冤を雪ぐべく奔走す
るのです。」

これは、幕末明治に活躍した漢詩人大沼沈山(1818~1888)の「大沼沈山(1818~1888)の漢詩」から引用したものだ。楚の季布が生を惜しみ漢の追手から逃れたのは笑うべきであ



▲小島鹿之助